

埼玉將軍山古墳出土の馬冑



上 斜め前方から

下 正面から

〈資料報告〉

埼玉将軍山古墳出土の馬冑

若松良一

1 はじめに

このほど、埼玉県立さきたま資料館では将軍山古墳出土馬冑復元品の製作を終了し、平成2年12月15日より展示公開を行っている。この馬冑は明治27年に、埼玉古墳群中の将軍山古墳の横穴式石室が崖崩れで露出した際に、村人が掘り出したものである。発見の年代から見れば、東アジアで最初に出土したことになる。ところが、この遺物は破片資料であることと、長らく個人所有であったことから、馬冑であることが知られずに約1世紀を経過してしまったのである。

馬冑発見の経緯について簡単にふれておきたい。さきたま資料館では、昭和48年に行田市内の所蔵家から将軍山古墳出土品の一括寄贈を受けた。この中には、挂甲小札や衝角付冑の破片を含んでいたが、細片となり種類不明のものもあった。その後、将軍山古墳周堀の調査成果を盛り込んだ『埼玉古墳群発掘調査報告書』第6集を刊行するにあたって、これらの資料を検討した結果、馬冑の破片のあることが判明した。さらに接合作業を進めたところ、主要部分の復元が可能となり、平成元年秋に開催された特別展示「古代東国の武人たち」を契機に公開され、常設展示を行ってきた。しかし、部分破片であるため、見学者の理解を助けるためには全体像の復元が必要であった。

本稿の目的は、将軍山古墳出土馬冑の実測図と写真を公表し、資料報告すると共に、復元品の製作根拠を明らかにすることにあるが、近年、朝鮮半島南部の伽耶地域から次々と発見されている馬冑との比較をとうして、将軍山古墳の馬冑の位置付けを試みることも重要な課題となろう。

2 将軍山古墳出土馬冑の特徴

現存部は左右の眼を中心とする面覆い部で、A 右眼前方の部分(タテ13.5 cm、ヨコ18.5 cm) B 左眼前方の部分(タテ9.1 cm、ヨコ18.5 cm) C 右目上方から天井にかけた部分(タテ10.5 cm、ヨコ17.5 cm)の3つのブロックに別れている。このうちAとCが接合するが、追跡調査の結果、東京国立博物館所蔵の一片D(タテ10.0 cm、ヨコ12.2 cm)がCと接合し、底部付け根の帯金と判明した。

A 面覆い部右眼前方破片(第1図A)

4個の破片が接合して1個のブロックとなった。横長の2枚の鉄板を重ねあわせて鋳留めしている。表面の向かって左側に眼孔の一部が残り、下側の鉄板の右端が斜行するエッジとなっているために、右眼の前方を覆う部分であることがわかる。

下側の鉄板は下端が水平に製作されており、端面は丸く調整されている。上端は直線的ではあるが、眼孔方向に向かって幅を増しており、最小幅4.8 cm、最大幅は7.1 cmである。上端の幅1.1 cmから

1.4cmの部分には上側の鉄板が重ねられており、鉋留めが行われている。鉄製の鉋は半球形の頭部をもち、その直径は0.4ないし0.5cmである。12個が現存し、1個は鉋頭を失っている。鉋の間隔は多少の違いはあるが、芯芯間で平均1.2cmである。この鉄鉋は厚さ0.2cmの2枚の鉄板を貫通して裏面でかしめられているが、裏面にはほとんどその痕跡が残っていない。なお、下側の鉄板のほぼ中央部には、内側からの叩き出しによって形成された卵型の突起があり横幅6.2cm、縦幅3.7cm、高さ1.0cmを測る。上側の鉄板は3方が欠損しているが、上端付近は鍍金して内側に折り曲げられている。その屈曲する部分は稜線となっているが、眼孔方向に向かって弓なりに下がっている。

下側の鉄板の右下側下端付近には1個の鉋が残っているが、裏側の対応する位置には幅1cmの方形の留め金具が付けられていた。裏面の観察では、2cm離れてもう1個の留め金具が確認されたが、他にも鉋の脱落した痕跡があったため、X線写真を撮影して調査した結果、新たに3個の脱落孔が発見された。このことから、現存部には合計5個の鉋が打たれていたことになる。なお、表面の中央部には目の細かな布が9箇所にわたって錆着している。総重量は165gである。

B 面覆い部左目前方破片（第1図B）

3個の破片が接合して1個のブロックとなった。馬の頭部をはさんでAと対応する部分であり、基本的にはAと同一に製作されている。表面の右端には眼孔の一部が残り、下側の鉄板の左端は斜行するエッジとなっている。上板と下板の重ねの部分には11個の鉋が現存し、2個が脱落している。下板を打ち出して作られた卵型の突起は、横幅6.4cm、縦幅3.9cm、高さ1.0cmを計る。下板の下端部には、X線写真調査によって、5個の鉋の脱落孔の存在が推定されたが、錆のため明瞭でない部分もある。これらは間隔が不統一であり、特に眼孔よりの脱落孔は他の脱落孔と大きく離れた位置に穿たれている。表面には布が6箇所にわたって錆着している。重量は124gである。

C 面覆い部右眼上方破片（第1図C）

3個の破片が接合して1個のブロックとなった。A、Bが垂直方向に用いられる鉄板であったのにたいし、水平方向に用いられる鉄板である。2枚の鉄板を鉋留めして製作されている。眼孔の残る鉄板の破面の一部でAと接合する。この鉄板の端部上面には、0.9から1.5cm重ねる状態で別の鉄板が鉋留めされている。馬の頭部の正中線にあたる位置となるので天井の板と見られる。現存する最大幅は4.9cmを計る。鉄鉋は13個が現存する。鉄板の表面には布が4箇所にわたって錆着している。一方、鉄板の裏面には木質が7箇所にわたって錆着しているが、それぞれの方向に相違が見られる。重量は119gである。

D 面覆い部天井後端破片（第1図D）

東京国立博物館所蔵で収蔵番号はB<36620-4>である。4枚の鉄板を鉋留めすることによって製作されている。眼孔及びその上方の破面でCと接合する。この眼孔を持つ鉄板の上方端部付近には天井板がかぶせられており、鉋留めされている。さらに、その端部の上面には帯状の鉄板が重ねられており、鉋で留められている。鉋は間隔や並び方に乱れが認められるが、3枚の鉄板が合わさる部分では1.1cmもある長い鉋が用いられている。帯金は外側の端部を遺存していないが、約5.3cmの幅で割れていることから見れば、まもなく端部となって、他の鉄板と鉋留めされていた可能性が高い。それは位置関係から見て、アングル形に作られた底部であったと推定される。なお、

帯金の小口と眼孔を持つ鉄板の下側の端部は一直線に並び、この裏側には端部をくの字形に折り曲げた鉄板が鋳留めされている。これはほぼ垂直に立つ鉄板であり、眼孔の後方の面覆い部となろう。

3 馬冑の復元について

将軍山古墳出土の馬冑は破片資料であるとはいえ、面覆い部の主要部分が遺存しているため、全体の復元が可能であった。しかし庇部、鼻先部、頬当部は現存していないため、推定復元をする必要があった。

ところで、将軍山古墳の馬冑は韓国釜山市の福泉洞10号墳出土品との類似性が多い研究者によって指摘されている。また実見していただき御教示を受けた京都大学の小野山節先生、釜山大学の申敬澈先生、釜山市立博物館の宋桂鉉氏からも同様の意見をいただいた。このため、馬冑復元の第一歩は福泉洞10号墳の馬冑実測図に将軍山古墳の馬冑の実測図を重ねあわせることから始めた。

つぎに、福泉洞10号墳との相違点について検討を加え、欠損部分もできるかぎり復元根拠をもった整合性のある復元に努めた。その一つは庇部の本体部との接合方法であり、もう一つは頬当部の垂下方法であった。この検討では、X線写真による調査が効果を発揮した。

復元品の製作方法については、欠損部を化学樹脂で製作し、現存部をはめこむコンポジット方式とした。現存部は保存状態が良好で安定しているため今回は保存処理を行わなかったが、将来に備えて、いつでも取り外すことが可能である。頬当の垂下については現存部に革帯を留めるわけにはいかないので、裏面に透明の亚克力板をまわして復元部に固定し、その下端から革帯を垂下させた。化学樹脂による復元部は矧板の重ねと鋳の立体感が十分に表現できるように、樹脂板を実際に重ねて金属製の鋳で固定した。仕上げには亚克力系の塗料を用いて、質感の再現と色調の調和に注意を払った。なお、東京国立博物館所蔵部分の複製も現存部と同様にはめこみ式にした。

以下に、復元された馬冑（第2図）の構造と法量について記述する。馬冑は面覆い部、庇部、頬当部からなる。このうち、面覆い部は左右に各2段の鉄板を用いており、上段の鉄板を屈曲させ天井部とし、これを正中線上の筋鉄で鋳留めしている。この筋鉄は台形の鉄板で、鼻先部で狭く、庇部に向かって、その幅を増している。復元値は最小幅3.0cm、最大幅8.0cm、長さ41.6cmである。この筋鉄の広い方の端部上には、直交して帯状の鉄板が鋳留めされている。復元幅は5.2cm、復元長は23.7cmである。この鉄板は位置関係から見て、庇部と関係するものと推定されるが、直接庇部の付け根となるものではなく、この鉄板を介して庇部が接合されていたのではないと思われる。庇部は福泉洞10号墳のものを模して製作したが、その場合、筋鉄の端部を直角に屈曲させて、庇部と鋳留めすることによって、強度を保つ工夫がされており、本例もこれに倣って復元を行った。

一方、筋鉄に平行して鋳留めされた面覆い部の矧板は、幅10cm、復元長41.6cmの長方形の鉄板に眼孔の一部となる挟り込みを施し、眼孔より前方の部分を鋳金の技法で折り曲げたものである。その屈曲部は稜線となり、馬の頭部の形にあわせて内湾しながら鼻先部へ向い、その幅を減じてい

る。鼻先は現存していないが、叩き出しによってラップ状に膨らむ形に製作されていたものと推定し、復元した。このように製作された面覆い部上段の矧板の下端には、さらにもう1枚の矧板が鉄留めされている。この鉄板は下辺が直線で、上辺がゆるい三角形の鉄板に眼孔の挟りを入れたもので、最大幅7.5cm、復元長34.3cmである。前端部は鼻先部まで達せずに眼孔の前方16.3cmの位置にあり、撫角状の面取りが施されている。また、眼孔と下端部は丸く調整されており、いくぶん肥厚している。眼孔の前方6cmの位置には卵形の突起があり、内側から約1cm叩き出している。これは馬の食槽を受けるためのものであろう。ところで、眼孔の後方には別の小型の矧板があり、これを介在させて天井部の鉄板と面側部の矧板とが接合されていたと推定される。その根拠は、矧板の厚さは平均0.2から0.25cmで、どの部位でも一定なのに、当該部分に残る鉄板の厚さは0.4cmもあり、一枚の矧板とは考えにくいことにある。

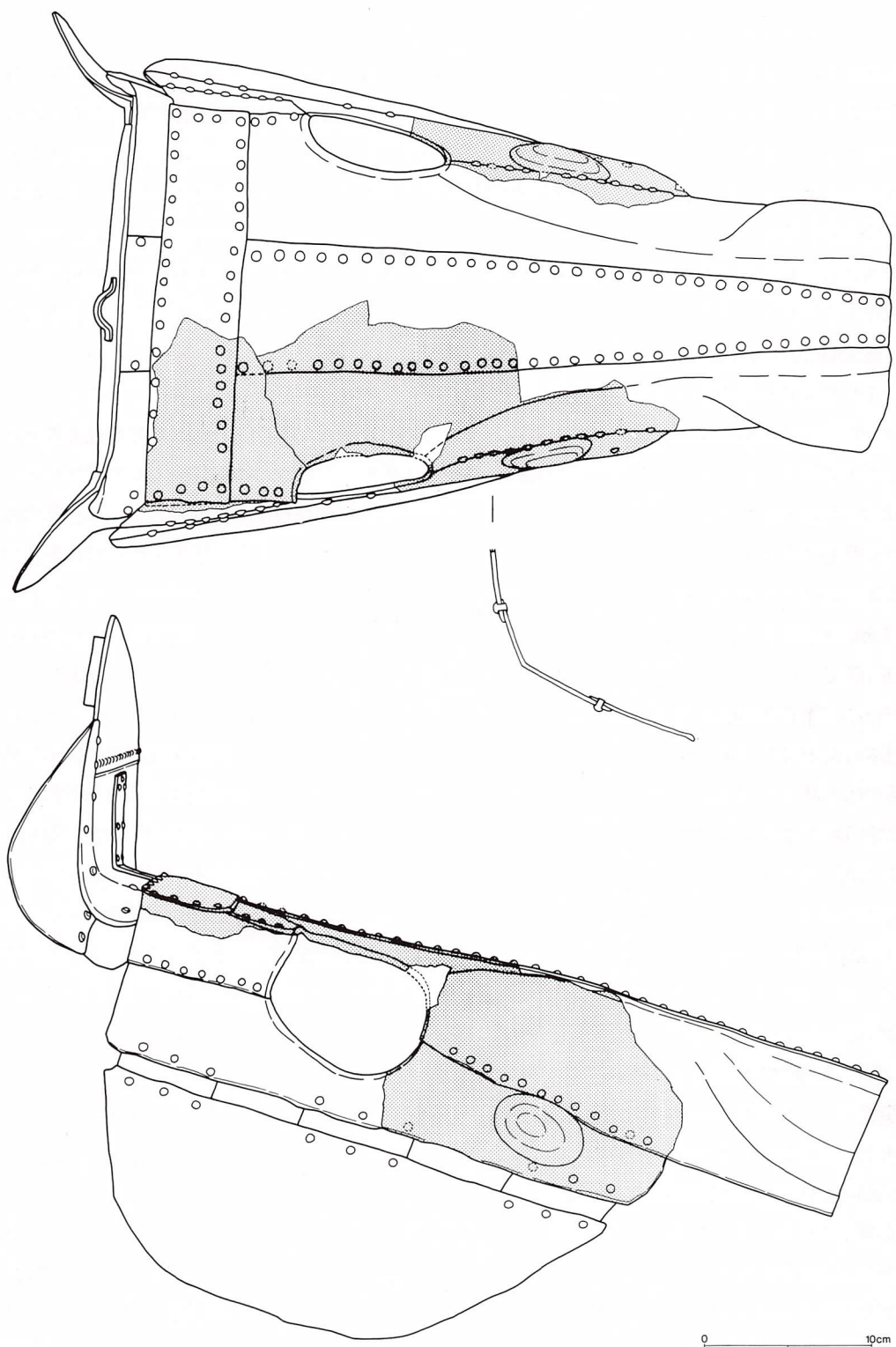
頬当部は現存していないが、半月形になることが一般的であり、その上端の幅は面覆い部下端の幅とほぼ等しいものと推定される。このことは、X線写真による調査で明らかになった革帯の留金具の配列からも窺うことが可能である。本例では、3個の鉄留めが1単位と見られ、両端部と中央部の計3箇所に幅6から7cmほどの革帯を介して頬当てが垂下されていたものと見ることができそうである。このような根拠を持って製作した将軍山古墳出土の馬冑の全体的な法量については、全長48.5cm、鼻先部の幅14.6cm、面覆い部の最大幅27.0cm、面覆い部の最大高12.3cm、眼孔は横長の楕円形で、長径9.4cm、短径6.5cmである。

最後に、鉄板の接合に使われた鉄留めの特徴について記しておこう。留めの形態や法量については前章でふれたとおりであるが、平均して芯芯間1.2cmで繁打されていることに一つの特徴があり、復元品では面覆い部だけでも、実に156個の留めが用いられていたことになる。これらの多くは2枚の鉄板を留めるために使用されているが、底部前方の帯金では、その下面に筋鉄と面覆い部の矧板の重なる部分があり、3枚の鉄板を貫く長い留めが用いられていることは注目に値しよう。

4 馬冑の系譜と製作年代

はたして将軍山の馬冑はどこで、いつ頃作られたものなのか。このことを知る手がかりはあるのだろうか。本章では、日朝の他の出土資料との比較をとうして、これらの問題を考えてみたい。

現在知られている馬冑の資料は、日本では和歌山市大谷古墳と埼玉県行田市の将軍山古墳出土の2例であり、朝鮮半島では、韓国釜山市福泉洞10号墳、同慶尚南道陝川郡双冊面城山里の玉田古墳群第28号墳の各一例と玉田古墳群M3号墳の2例、そして釜山市五倫台古墳群の表採資料(註1)の計5例である(所在地の位置は第3図に示しておいた)。このうち、五倫台の資料はまだ公表されていないため、ここで扱うことはできない。なお、かつて末永雅雄博士が馬冑と推定した福岡県月の岡古墳出土資料(註2)は、韓国慶尚北道大邱市達西第34号墳出土品、同慶州98号古墳南墳出土品、同天馬塚出土品(註3)、同釜山市福泉洞11号墳出土品(註4)と同様の形態と構造を備えており、脛甲と見て誤りなく、現在、脛甲として復元されている(註5)ことを付言しておく。



第2図 將軍山古墳出土馬靑復元品実測図 (1/4) アミかけ部分が現存部

(1) 大谷古墳出土馬冑 (第4図1)

昭和32年、日韓を通じて最初の発見例となった資料である。面覆い部は4枚の鉄板からなり、幅の広い眉間板と鼻梁板を鋌留めして天井部とし、鼻先部を含めて1枚作りの両側板が、これに鋌留めされている。鼻先部はラップ状に大きく膨らんでいる。また、眼孔の前方には食槽を受けるための楕円形の脹らみ、眼孔の後方には眉上弓の突起を受けるための脹らみが叩き出されている。底部は3枚の鉄板を用いて三山形に製作しているが、中央部下端が半円形に切り抜かれている。本体との接合は眉間板の後端を折り曲げて背面に重ねて鋌留めすることによって行われている。頬当部は半円形の1枚板で、革帯を介して垂下されていたと見られるが、留金具は3箇所にある。長さ52.6cm、最大幅24.5cmを測る(註6)。

(2) 福泉洞10号墳出土馬冑 (第4図2)

1980年から1981年にかけて実施された調査で発見された。面覆い部は左右各3枚の鉄板で構成されたものを天井の正中線上で、幅3cmの細長い鉄板を2枚継いだ筋鉄によって矧ぎ合わせている。底部は半円形の底の左右に小さい耳当てを付けたもので、6枚の鉄板から構成されている。頬当は2枚の鉄板を鋌留めして製作されているが、このうち、上段の板には眼孔の挟り込みと食槽を受けるための脹らみがある。頬当は4箇所の留め金具によって垂下されている。頬当後端に付く留め金具は馬冑を固定するための紐が付けられていた可能性がある。長さ51.6cm、最大幅24.4cmを測る(註4)。

(3) 玉田28号墳出土馬冑 (第4図3)

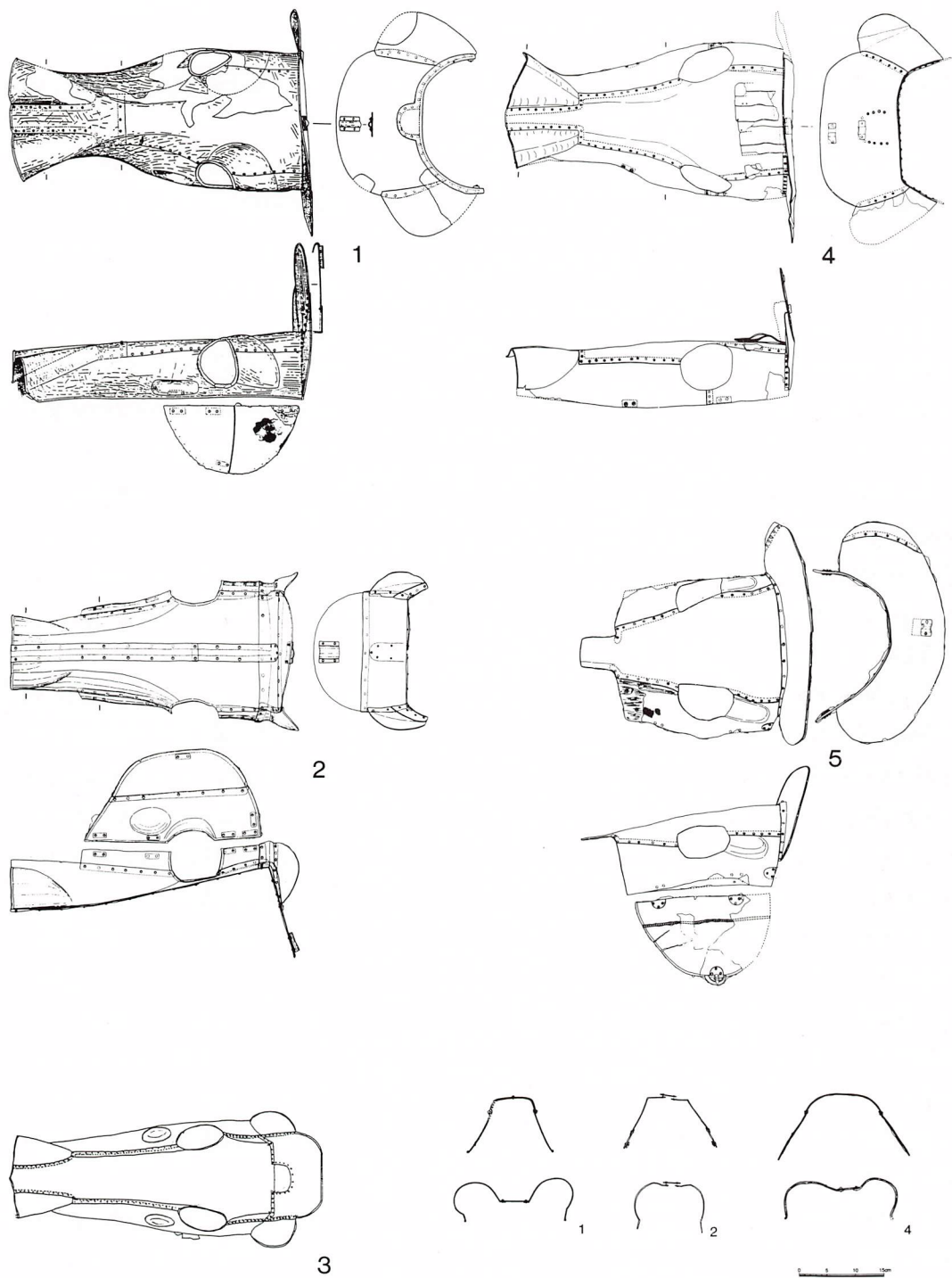
1985年の調査で発見された。正式な実測図はまだ公表されていないが、見取図と写真によって概略を窺うことができる。面覆い部は3枚の鉄板から構成され、眉間から鼻梁を覆う大きな鉄板の左右に各1枚の側板が鋌留めされている。側板の眼孔前方に食槽を受ける脹らみがあるほか、眼孔付近も大きく張り出している。底部は半円形の鉄板の左右に、側板の後端部を折り曲げた部分を鋌留めしたもので、三山形を呈するが、中央部下端に半円形の切り込みがある。本体との接合は、底部下端を折り曲げて鋌留めする一方、眉間板の半円形の突起を折り曲げて、底部の背面に当て鋌留めしている。頬当部は半円形の鉄板で、二箇所の留め金具を使用して垂下されている。長さ56.2cm、最大幅34.2cmを測る(註3)。

(4) 玉田M3号墳出土馬冑A (第4図4)

1987年から1988年にかけて実施された調査で、馬冑Bとともに発見された。面覆い部は5枚の鉄板から構成され、眉間から鼻梁にかけた部分を覆う大きな鉄板の左右に側板が鋌留めされている。この側板は眼孔部を境界に2枚の鉄板を鋌留めしており、前方の板の先端は大きくラップ状に膨らむ鼻先部となっている。底部は3枚の鉄板を鋌留めして、三山形



第3図 馬冑出土古墳の分布



第4図 馬冑実測図集成(1/12) 1 大谷古墳 2 福泉洞10号墳 3 玉田28号墳 4 玉田M3号墳A
 5 玉田M3号墳B (右下の図は当該番号馬冑の横断面で、上段が面覆い部、下段が鼻先部)

に製作されている。本体との接合は、底部下端を折り曲げて鋲留めするほか、眉間部後端の半円形の突起を折り曲げて、底部の背面に当て、鋲留めしている。頬当部は失われているが、2か所の留め金具で革帯を固定し垂下されていたことがわかっている。長さ49.5cm、最大幅25.5cmを測る（註7）。

（5）玉田M3号墳出土馬冑B（第4図5）

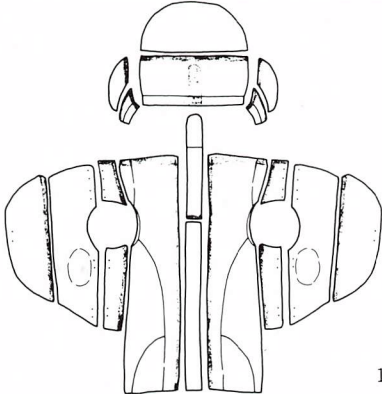
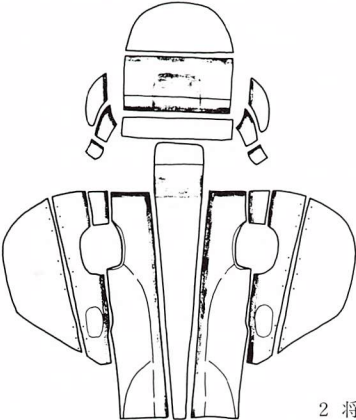
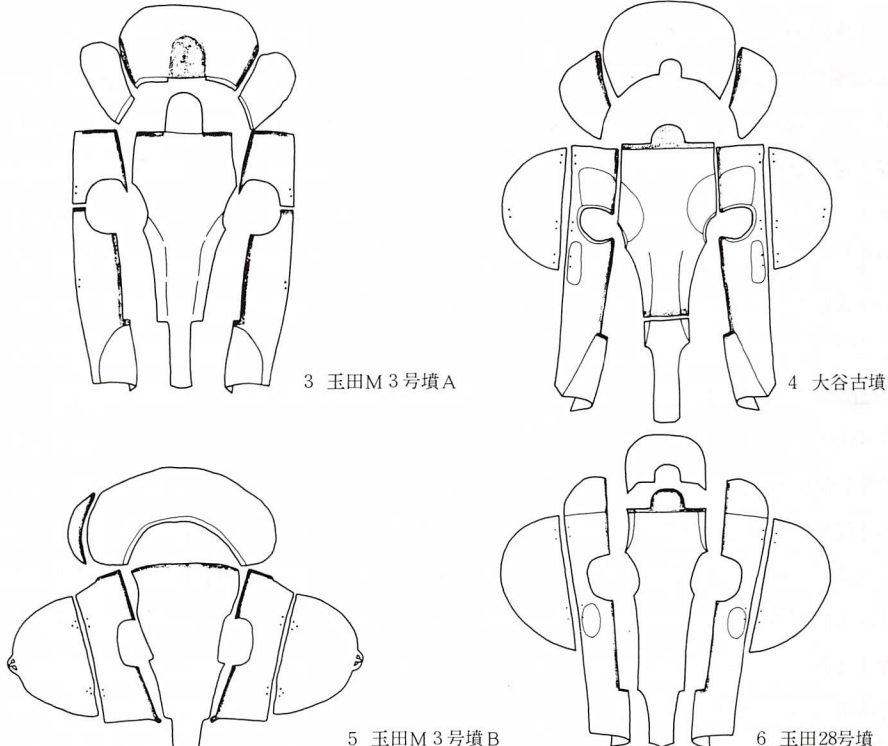
面覆い部は眉間から鼻梁にかけた大きな鉄板の左右に1枚の側板を鋲留めして製作されているが、鼻先部を作らない点を特徴としている。また、眼孔の後方には打ち出しによって脹らみを持たせた部分がある一方、食槽を受ける脹らみはない。底部は1枚の円弧形の鉄板の片側に三日月形の小さい鉄板が継がれているが、これは当初の意図に反して行った措置とも見られる。本体への接合は底部下端を折り曲げて鋲留めすることによって行っている。頬当部は半円形の鉄板で、2か所の留め金具で革帯を固定して垂下されている。2枚の頬当の一方には尾錠が付けられているので、革のベルトを他方に取り付けて緊縛したのであろう。長さ36.5cm、最大幅27.2cmを測る。

以上瞥見してきた馬冑は、すべて鉄製であること（厚さも0.2cm前後）、底部と頬当部を備えている、後者は革帯を介して垂下されていること、鉄板の接合に鋲留めの技法が採られていることなど共通点が多い。また、基本的には馬の頭部を覆う防御具であるという点で、大体の形は似通っている。しかし、矧板の構成法には差異が認められ、系譜や編年を考えるうえでの手がかりとなりうるのではないかと思われる。

第5図は各資料の矧板の展開図である。黒塗の部分は矧板の重ねの部分を示している。また、頬当を垂下するための留め金具の位置も表示しておいた。これによると、面覆い部と頬当て部を合わせて何段構成になるのかという基準で分類することが可能である。最も段数の多いのは福泉洞10号墳の5段構成で、12枚の矧板から構成されている。特徴的なのは、天井の正中線状に細長い筋鉄を用いて左右を矧合わせている点と、頬当て部が2段構成で、そのうち上段には眼孔の挟り込みを伴っている点である。また、底部が多数の矧板によって構成されている点も見逃せない。

4段構成となるのは將軍山古墳の例である。面覆い部の天井正中線状に筋鉄を用いる点で福泉洞10号墳例と共通しているが、より幅の広いものとなり、形も台形状になっている。大きな相違点は、頬当部が1段となった点である。これは、頬当上段の矧板を分離して、面覆い部に鋲留めした結果であり、福泉洞10号墳例からの発展と見ることができよう。本例のように面覆い部の下端に段を生じている例は次に示す3段構成品には見られない特徴である。將軍山古墳例では眼孔の後方に小さい矧板を用いている点では5段構成の要素も残存しており、福泉洞10号墳例の影響を受けて、時期的にも近接した段階での製作という観が強い。

3段構成の例は、4例ある。このうち、玉田M3号墳の馬冑Bは鼻先部を製作しない簡易型の馬冑で、底部も1枚の鉄板で製作する弧形のものである点などから別に扱ったほうが良いだろう。さて、玉田M3号墳の馬冑A、大谷古墳例、玉田28号墳例には非常に強い共通点が認められる。それは、天井部をカバーする幅の広い矧板が採用される点であり、鼻梁部の幅を狭くする矧板の形態も類似性が高い。一方、これに対応して、側面の矧板は先端部を鍵形にし、この部分を叩きだすことによって、大きくラップ状に開く鼻先部を作る点で三者は共通している。また、底部の形態も三山

<p>5 段 構 成</p>	 <p>1 福泉洞10号墳</p>
<p>4 段 構 成</p>	 <p>2 将軍山古墳</p>
<p>3 段 構 成</p>	 <p>3 玉田M3号墳A</p> <p>4 大谷古墳</p> <p>5 玉田M3号墳B</p> <p>6 玉田28号墳</p>

第5図 矧板からみた馬冑の分類

形である点で共通している。玉田M3号墳A例では側板を2枚矧としている点や大谷古墳例が天井板を2枚矧としている点、底部の接統手法が三者とも異なるなどの小さい相違点はあるものの、これらは、基本的には同一類型に属するもので製作時期の差は大きくないものと推定される。

馬冑の製作年代について、堀田啓一氏は高句麗の壁画資料の年代観を念頭におきながら、好太王碑が示すような高句麗・新羅連合対百済・倭国連合の対立関係下での軍事衝突によって4世紀末から5世紀初頭にもたらされたと考えている。また堀田氏は福泉洞10号墳の馬冑を高句麗騎兵の残した遺物と捉え、実際に高句麗軍が洛東江河口まで南下し、この地域を支配したと解釈している(註8)。型式的には、福泉洞10号墳の馬冑の庇が丸形(CI類)で古く、4世紀末から5世紀初頭の高句麗での製作、大谷古墳のものは三山形(CII類)で新しく、5世紀前半の百済での製作と見ている。

この論考は、歴史事象の中で馬冑を捉えようとする点ですぐれているが、年代観については、伴出資料の検討や馬冑自体の製作技法の位置付けを欠いており、古きに失しているように思う。また、系譜論についても通溝三室塚古墳の攻城図が根拠であり、資料的に限界があろう。これに対して、申敬淑氏は報告書(註4)の中で、豊富な馬具や甲冑それに土器類の詳細な検討から、福泉洞10・11号墳の時期を5世紀の30年代と推定した。筆者は、現存する馬冑の中で最古式と推定される馬冑の製作に鋳留め技法が採用されていることに注目しており、日本では5世紀の第2四半期に渡来技術工人によって鋳留めの技法が鍍金などの技術と一緒にもたらされて、甲冑製作の技術革新が行われたとする小林謙一氏の実証的な研究(註9)が馬冑の年代を推定するうえで有力な手がかりになりうると考えている。

一方、馬冑の中では新しいグループと推定された三段構成品の製作年代については、いくつかの手がかりがある。大谷古墳からは、横矧板鋳留短甲、長茎式の鉄鏃、曲刃鎌、木心鉄板張輪鏝、同壺鏝、f字形鏡板、剣菱形杏葉、垂飾付き耳飾り、鈴鏡などが出土しており、5世紀後半代の副葬品セットと見られる。さらに限定するならば、円筒埴輪がタテハケ調整品で、川西宏幸氏のいうB種ヨコハケ(註10)を含まない点において、5世紀後半でも新しい時期に比定できるのではないかと思う。玉田M3号墳からも大量の刀剣類、馬具、甲冑、耳飾りなどが出土しており、このうち馬具や耳飾りは大谷古墳との間に共通性が認められる。趙榮濟氏は報告(註7)の中で、土器を重視し、M3号墳の土器を池山洞44号墳の土器と対比したうえで、禹枝南氏の土器を中心に据えた本格的な伽耶地域の古墳編年(註11)や定森秀夫氏の陶質土器の研究(註12)を参考として、M3号墳の年代を5世紀末から6世紀初頭と推定した。玉田28号墳については正式報告がこれからであり、年代を具体的に推定されていないが、横矧板鋳留短甲が出土している点が参考になる。

高句麗地域から実物の馬冑の出土が知られていない現在、対比が不可能であり、鋳留技法の上限がもう少し遡りうる可能性を残しているものの、詳細な編年体系の確立しつつある伽耶系の陶質土器の年代観をめぐる日韓の研究者の真摯な検討を尊重して、馬冑の製作年代を考えるならば、5段構成で最古式の福泉洞10号墳出土品を5世紀の第2四半期に、將軍山古墳出土品をその直後の5世紀の第3四半期の早い時期に比定できるのではなかろうか。これら初期の馬冑が、多くの矧板による複雑な構成で、製作に多大の労力と時間を要するのに対して、3段構成品の場合、面覆い部の天

井部に大きな鉄板を採用し、鍔金技法の向上と相俟って矧板を大幅に減らしたことには、技術的な革新が認められる。このことは製作工程の省力化と範型の確立が大量生産を可能にしたことを示すものと見られ、ほとんど同一形態の製品が3例も見られたことはこの間の事情を反映したものと考えて良いだろう。これらは將軍山古墳出土品との間に、多少の時間差を推定するべきであり、5世紀の第4四半期に比定するのが妥当ではないかと考えている。

ところで、馬冑の製作地については、既に紹介した堀田氏のように高句麗及び百済と推定する意見のほかに、倭製と見るむきもある。岩崎卓也氏と中山清隆氏は大谷古墳の馬冑の組立てがシャープでないことから、半島製ではなく、畿内中枢部の工房の作と推定した。その根拠として、当時の畿内の工房の技術水準から見て、馬冑の製作が十分可能であることをあげ、渡来系工人や倭人の工房を組織した倭王権の下賜品の可能性をといいた(註13)。

しかし、倭製と見るにはあまりにも日本国内での出土例の少ないことが気にかかるし、大谷古墳の出土品は、既に見たように、矧板の構成法と形態の両面で伽耶地域出土品との著しい共通性を有している。筆者は、馬冑を出土した伽耶地域の古墳が竪穴式石槨墓もしくは副室を備えた竪穴式石槨をもつ封土墳という伽耶独自の墓制を採り、大量の伽耶系の陶質土器を副葬している事実から、これらは大伽耶連合下の地域国家の首長墓と見るべきと考えている。彼らがどのようにして馬冑を入手したのかは議論の別れるところだろうが、少なくとも高句麗軍からの略奪品というような解釈は分布論の上から成り立ちえないだろう。やはり、伽耶地域に集中して出土する馬冑は、伽耶地域の製作を考えるのが最も素直であり、高句麗との緊張関係の中で、高句麗の馬冑を模倣しながら、その製作手法を修得し、独自の工房で集中的な生産を行って、伽耶の軍装に取り入れたと考えたい。そう考える根拠の一つとして、日本国内からは今後も馬冑の多量の発見は想像しにくいのに対して、韓国では発掘調査の機会が日本とは比較にならないほど少ない中で、近年、馬冑の出土例が短期間のうちに増えているという事実がある。また、玉田M3号墳のように複数の馬冑の副葬例も知られる状況から見て、伽耶地域では今後も馬冑の発見例が増加するものと見られ、その密度の高さこそが問題となるのである。

5 將軍山古墳出土馬冑の提起する問題

馬冑を出土した將軍山古墳は埼玉古墳群中の大型前方後円墳で、推定の墳丘主軸長は102mを測る。明治27年に墳丘が崩れて、横穴式石室が露出した際に、村人が発掘し、大量の遺物を得たが、現在その一部が、東京国立博物館、東京大学総合研究資料館、埼玉県立さきたま資料館、埼玉県立博物館、本庄市立歴史民俗資料館などに分有されており、このほか個人蔵品もある。これらの中で主なものに、乳文鏡、素環鏡板付轡、金銅製心葉形鏡板付轡、鉄製輪鍔、八角稜ナス形銅鈴、金銅製環頭大刀、銀装大刀、鉄鉞、金銅製三輪玉、水晶製三輪玉、挂甲、横矧板鋌留衝角付冑、馬冑、蛇行状鉄器2、石製盤、銅鏡2、高台付有蓋銅鏡、ガラス小玉、金製勾玉、金製丸玉などがある。後年散逸したものも多いので、副葬品の量と質には眼を見張るものがある。

將軍山古墳の築造年代は馬具の型式、長脚二段三方透しを持つ須恵器無蓋高杯、銅鏡、円筒埴輪

の残存を総合すると、6世紀後葉と推定される。問題となるのは、先に検討した馬冑の製作年代との間に約1世紀のギャップのある点である。この問題については、既に金井塚良一氏（註14）と駒宮史朗氏（註15）から伝世と見る見解が提出されているが、筆者も同様に考える。この馬冑が埼玉古墳群の首長たちに代々伝えられたものと仮定すれば、馬冑の製作年代は金錯銘鉄剣を出土した稲荷山古墳の被葬者乎獲居の活躍した時代と一致する。

筆者は、我国の馬冑のもう一方の出土地が紀氏の墳墓と目される大谷古墳であることと、本来馬冑とセットをなす蛇行状鉄器の分布が、半島への門戸であり、筑紫水軍の本拠地と見られる宗像郡や瀬戸内海沿岸、そして蘇我氏の氏寺飛鳥寺から出土している点を重視して、これらが瀬戸内航路を利用して実際に朝鮮半島におもむいた軍事氏族が彼の地から将来した可能性を考えている（註16）。5世紀後半は百済の都漢城が陥落し、蓋鹵王が高句麗の長寿王に斬られるなど半島での軍事衝突が顕在化した時期であり、倭人が百済救国を旗印に盛んに半島への軍事行動をとった時期でもある。倭王武の上表文の中にも高句麗の無道を糾弾する下りが見える。既に小林謙一氏（註9）や川西宏幸氏（註17）が指摘しているように、この時期には北部九州の横矧板鋌留短甲が畿内の出土量を上回るようになる。また、近年、半島での鋌留短甲の出土例がにわか増加している。このような状況下で、東国の有力軍事氏族が馬冑を入手した可能性を考えるのもあながち無稽のことではないだろう。

おわりに

将軍山古墳の馬冑の検討を進めるにあたって、小野山節、金井塚良一、申敬澈、趙榮濟、宋桂鉉、定森秀夫、太田博之の各先生から御教示と資料の提供を賜った。また、X線写真調査については岩本克昌氏、図版の調整については沢田秀実氏のお手をわずらわせた。記して厚く感謝申し上げます。紙数と不勉強によって意を尽くせない部分がありましたが、今後の課題としたいと思います。

註

- 1 宋桂鉉氏より御教示いただいた。
- 2 末永雅雄『日本上代の甲冑』1944
- 3 李康七『韓国 甲冑』韓国文化公報部・文化財管理局 1987
- 4 鄭澄元・申敬澈『東萊福泉洞古墳群Ⅰ』釜山大学校博物館遺蹟調査報告第5輯 1983
- 5 平川裕介『月岡古墳』国指定重要文化財出土図録 吉井町教育委員会 1989
- 6 樋口隆康・西谷真治・小野山節『増補 大谷古墳』同朋舎出版 1985
- 7 趙榮濟・朴升圭『陝川玉田古墳群Ⅱ』慶尚大学校博物館調査報告第6輯 1990
- 8 堀田啓一「古代日朝の馬冑について」奈良県立橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』第13冊 1987
- 9 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」『考古学研究』通巻80・82 1974
- 10 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 1978～1979
- 11 禹枝南著・定森秀夫訳「大伽耶古墳の編年」『古代朝鮮と日本』古代史論集4 名著出版 1990
- 12 定森秀夫「韓国慶尚道高靈地域出土陶質土器の検討」『東アジアの考古学と歴史』上 1987
- 13 岩崎卓也・中山清隆「古墳時代と大陸文化」『李刊考古学』第33号 1990
- 14 金井塚良一「埼玉将軍山古墳の馬冑」『歴史手帖』17-9 1989
- 15 駒宮史朗『古代東国の武人たち』特別展図録 埼玉県立さきたま資料館 1989
- 16 若松良一「埼玉県将軍山古墳の馬冑」『李刊考古学』第33号 1990
- 17 川西宏幸「中期畿内政権論」『古墳時代政治史序説』 1988